

【8】 結果と考察

本年度は、「からだづくりを通して」の3年次であり、昨年度までの運動場面、生活場面での実践を少しずつ生活場面に比重を移しながら個人目標にせまり、社会的自立を目指した。

(1) 運動場面における変容

一昨年より、特に保健体育では、身体を動かすことの喜びやその運動の持つ楽しさを味わわせ、運動経験を少しでも増やすことをねらってきた。その結果、少しずつではあるが、その運動の持つ楽しさを体得し、休憩時間にバスケットボールや、サッカー、なわとび等をしようとする生徒が現れてきた。さらには、一人ひとりの実態に応じたためあてや課題を明確にしようとしたことで、自分なりに見通しを持ち、「すすんで」学習したり、「生き生きと」運動する場面が多くなったように思う。

また、養護・訓練でも10分間走における、一人ひとりの走力、持久力に応じたためあての設定、そして評価を繰り返した結果、ほとんどの生徒がためあてが高まり記録が向上しつつあると言える。課題別トレーニングでも発達段階別（運動機能習熟度別）に小集団に分け、少しでも一人ひとりの抱えている課題を克服するために具体的実践を重ねた結果、運動能力、体力とも徐々にではあるが数値としても伸びが見られている。（「資料編」参照）

(2) 生活場面における変容

本年度は、生徒の実態の重度、重複化に伴ない、特に職業科、生活一般の学習場面で、いわゆる教育課程編成上、課題別学習集団を形成したことが大きな特徴であると言える。つまり、一人ひとりの今持っている力、能力を、一時間一時間の学習の中で最大限に発揮させることができる環境を整え、場の設定を工夫したということである。すなわち、一単位時間の学習の中で自分の課題達成のために「活動しきる」ことが、より多くの「動き」の獲得や潜在能力を引き出すことにつながり、自分なりに見通しを持ち、「すすんで」そして「生き生きと」活動することを目指していけるのではないかと考えたわけである。その結果、個人目標における4月の実態から10月の実態の変容（「資料編」参照）を見てもわかるとおり、一人ひとりの「社会的自立」という大きな目標に向かって少しずつではあるが確実に近づいているのではないかと考える。

【9】 今後の課題

成果は徐々に表われてきてはいるものの、今後の課題も山積みである。まず第一に、行事が非常に多く、特に継続して実践すべき内容において細切れになってしまった。実践の期間が確保できず、なおかつ行事単元学習としての実践は主たる研究実践の場としなかった為、その実践が生かされなかった。第二は、課題別学習集団を試みたがその編成上の問題点も多く、今後さらに重度、多様化する生徒の実態の中でいかに「個」を生かしながら、かつ「集団」の中で育てていくことができるかである。

このように課題は少なくないが、生徒一人ひとりがそれぞれの実態に応じた社会参加を目指し、持っている力や獲得した力を少しでも社会の場に生かすことができ、一人ひとりに応じた社会的自立ができるように、今後も研究を重ねていきたいと考えている。